

嗜好品が政治を帯びるところ ——「つながり」と「からだ」——

京都精華大学教授 齋藤 光

昨年度 (2016 年度)、嗜好品文化研究会では年間研究テーマ「嗜好品と政治学」に沿って、3回の研究会が行われた。水島治郎氏からは「オランダと嗜好／志向の政治学」、岡本勝氏は「アメリカにおける酒類とタバコの規制に関する歴史」、速水健朗氏は「オーガニックフードは政治選択なのか、または嗜好品なのか」というご報告をいただいた⁽¹⁾。それらを踏まえて嗜好品が政治を帯びるあり方を考えるとき、政治というものをどう考えるか、あるいは政治学をどう捉えるのかについて二つの構図があるのではないだろうか。

1. 「嗜好品と政治学」というとき

一つは、嗜好品や嗜好品的なモノ・コトのあり方が一定の力で制御されることを指す場合である。嗜好品が何らかの形で規制されるという力学が、嗜好品と政治 (あるいは政治学) との関係ということになるだろう。

もう一つは、速水さんの報告を聞いたときに思い至ったのだが、嗜好品や嗜好品的なモノ・コトの状況を、政治に関わるもの、政治

的につながることを捉える視点である。午前中の大学院生による助成研究口頭発表に「嗜好品としてのアイドルグッズとアニメグッズ——台湾哈日族が抱く「妄想」に関する文化社会学的研究」の発表があったが、これは、後者の視点と考えることができよう。

つまり、「嗜好品と政治学」というとき二つの構図があり得るのだ。両構図の間には何らかの関係性がありそうだが、まだうまくまとめられてはいない。それについて皆さんにも一緒に考えていただきたく思い、以下でいろいろ整理してみたい。

2. 昨年度のおさらい

水島氏は「オランダと嗜好／志向の政治学」で、近現代のオランダにおける「嗜好」と「志向」を対象に、その両者の制御における対照性を指摘された。「嗜好」については飲酒と喫煙、「志向」についてはドラッグ、安楽死、同性婚、売春が主な例として挙げられた。結果、オランダでは、「志向」の自由は尊重するが「嗜好」については制限される。プロテスタンティズムの枠組みではこのように考えられるだろうことが報告された。

これに対してカトリシズムは逆の対応関係があるのではないかと、とのことである。同性

「志向の尊重」と「嗜好の制限」 プロテスタンティズム



「志向の制限」と「嗜好の開放」 カトリシズム

(水島治郎「オランダと嗜好／志向の政治学」)

(1) 嗜好品文化研究会ウェブサイト>研究会の記録>平成28年度 年間研究テーマ「嗜好品と政治学」
水島治郎「オランダと嗜好／志向の政治学」
http://www.cdij.org/shikohin/minutes/minutes28_1.html
岡本勝「アメリカにおける酒類とタバコの規制に関する歴史」
http://www.cdij.org/shikohin/minutes/minutes28_2.html
速水健朗「オーガニックフードは政治選択なのか、または嗜好品なのか」
http://www.cdij.org/shikohin/minutes/minutes28_3.html

婚などが分かりやすい例だと思うが、「志向」に対しては制限という形がより強くとられる。これに対して、楽しみという意味の「嗜好」については開放的であるという。勉強になるところが多かった。

第2回研究会、岡本氏の「アメリカにおける酒類とタバコの規制に関する歴史」では、アメリカが植民地だった17世紀はじめから現代に至るまでの酒類・たばこに関する禁止のあり方について、歴史的な流れが示された。私なりの解釈では、そこからはある種の傾向性が見てとれる。道徳的宗教的規制がまずあり、それに基づいて法的な規制が導入され、やがて、科学技術的な基盤を持った法的規制に至る。さらに、規制または政治に関わる要素が科学技術権力へと収斂されていく。この流れは、近現代における一般的原則である可能性が高そうだ。

第3回研究会では、速水氏が「オーガニックフードは政治的選択なのか、または嗜好品なのか」という題で、1960年代、70年代以降のアメリカにおける飲食嗜好とそれに関係するライフスタイルが政治思想と連動的であるという可能性について、さまざまな例で示された。

典型的事例でいえば、スターバックスの心地いい空間で割高なコーヒーを飲む人たちは、都市リベラル層に属するという連動である。その都市リベラル層と民主党支持者は、かなりの部分で重なっている。よって、民主党支持者はスターバックス・ピープルと呼ばれる。

これに対して、地方に住む人たちが好む「文化記号」は缶ビールのクアーズ・ビール。主に農村部に住み、チェックのネルシャツを着てジーンズをはき、週末にはアメリカン・フットボールの試合をテレビで観戦しながら、ビールを楽しんでいる。彼らの支持政党は共和党が多い。

このように現在のアメリカの政治的な分断と嗜好生活的な分断は、ぴったりと対応して

いるようにみえる。日本でこういうはっきりした分断があるのかどうかは分からないが、コンビニ弁当の事例でいうと、自然食志向のお弁当は都市部ではそれなりにニーズがあってよく登場するが、地方や都市郊外ではなかなか売れないために全国企画として定着しない。他方、揚げ物重視のボリューム弁当は、地方や都市郊外で確実に売れて、一定のニーズが常にある。缶コーヒーの甘さへの嗜好も都市部と都市郊外では違いがある。日本ではそういうところに嗜好生活的分断と政治的な分断の一致ないし連動があるかもしれない、ということが示唆された。

これらを私なりに整理すると、次のようなことがいえるのではないかな。

3. 嗜好品を考えたときの「政治」とは

嗜好品のあり方を制御する形の「政治」については「楽しむことはルール化される」と集約されそう。一方、一定の嗜好品を嗜むことの「政治」については「楽しむことは政治的なことである」ということになるだろう。特に、後者は「つながり」と関係がありそうにみえる。

もう一つ分かったのは、日本語でいうと音が同じ「嗜好」と「志向」は、複雑ながらも関係性があるのではないかなということである。その関係が一定の政治性を召喚する可能性があるのではないかな。ただしこれは、私が漠然と思っただけで、事例を挙げて検証するところまではできていない。

さて、嗜好品を理解し問題化する絶対的な力として、科学技術がある。この場合、科学技術は必ず身体を通して働いてくるという特徴がある。私はもともと理系の人間だが、現在の科学技術のあり方については批判的なスタンスをとらざるを得ないので、「科学技術はここでもこんなに悪いやつだったか」と思う。あるいは、常々こう考えているせいで、そこ

に思い至ったのかもしれない。

4. 原始嗜好品（プレ嗜好品）と嗜好品

嗜好品に関する歴史的な流れはいくつかの段階に分けられる。

嗜好品という概念自体は近代的なものである。私たちの社会の中で、例えばお茶は嗜好品として存在しているのだが、前近代において文化に組み込まれてしまっていると、それが嗜好品だと認識されることはない。比較の対象が現れたり、あるいは文化人類学者が調査するといったことによってそれが嗜好品として認識される。その前の状態に名前をつけるとすれば「原始嗜好品」あるいは「プレ嗜好品」になるだろう。それが文化や社会を越境することによって、政治を引き起こすと思われる。

午前中の研究助成口頭発表で、「西南高原地域における茶の嗜好品化と諸部族ネットワーク」の話があり、ああこれだ、と思った。交流を介してチベットにお茶が入りバター茶になっていくという経緯は、まさしくお茶がチベット文化の中に組み込まれて原始嗜好品化する、プレ嗜好品化するということにあたるのではないか。

こういった個別過程は地球上のさまざまなところで発生する。臼井隆一郎先生が話されたコーヒーについても同様である。社会が文明化（文明化の定義は難しいが）されていくときにコーヒーは登場してくるのだが、ヨーロッパ世界が立ち上がっていくときには嗜好品とい

うものが経済的な、心理的な大きな力になっていった。ヨーロッパ世界がグローバル化という形に進んでいくなかでは、複数の文化と接したり多様な文化を内包している文明が、「プレ嗜好品」などを菓型の嗜好品と毒型の嗜好品として、受け入れまたは排除する、という形になっていく。最終的には欧米社会や西洋文明は、世界商品としての嗜好品を確立して、それぞれ一定の政治を帯びさせる。

5. 20 世紀後半からの二つの方向性

さて、そうすると第4段階もあるのではないかな。なかでも20世紀後半からは二つの流れがありそうだ。

一つは、科学技術による嗜好品の政治化である。化学によって物質特定が進む。そうすると嗜好品の内実は分かるようになる。嗜好品における消費や嗜好品の体験、経験について分かるようになるわけではないが、その分からないということさえも科学技術は隠してしまう。また、医学生物学によって物質の生理・病理作用の解明も進む。解明が進めば、我々は何でも分かった気になってしまう。こうして健康な「からだ」が個人にとっても、社会にとっても最優先されるという方向で、政治が働いてくる。そこでは、これまでの嗜好品が、嗜好品による体験という域を棚上げにして「実証」的に問題化されてくる。これが徹底的に合理化されると、先ほどの臼井先生の話のアウシュビッツのような問題につながっていくと私は思う。

そうすると、楽しみの極小化、あるいは楽しみという政治が失墜することになるだろう。これが20世紀後半からの嗜好品の政治化という問題の一つの流れだと思う。

もう一つは、生存リスクが極小化していることと関わる。日本の乳児死亡率を例にとると、1960年は1,000人当たり30.7人であった

「原始嗜好品」あるいは「プレ嗜好品」が文化や社会を越境することにより、政治を引き寄せた（個別過程）



複数の文化と接したり多様な文化を内包する文明が「プレ嗜好品」などを「嗜好品/薬」として受け入れる、あるいは「嗜好品/毒」として排除する。



欧米社会/西欧文明は、世界商品としての「嗜好品」を確立し、一定の「政治」をそれぞれに帯びさせた。

が、2015 年は 1.9 人と激減している⁽²⁾。乳児死亡原因も全く変わっており、1960 年は肺炎が 26%、腸管感染症が 8%、先天奇形変形および染色体異常が 6%、出生時仮死・周産期特異的呼吸障害 5%であったが⁽³⁾、2015 年は先天奇形変形および染色体異常が 37%、出生時仮死・周産期特異的呼吸障害 13%、乳幼児突然死症候群 5%となっている⁽⁴⁾。このように生存リスクが極小化した結果、生存維持的な「もの」「こと」の価値の相対的な下落化が起こっていると思う。別な言い方をすれば、生存維持に必須のアイテムが絞り込まれ、生存維持との関係が深くなり、つまり、嗜好化可能なアイテムが広がりを見せることになる。

6. 嗜好品のこれから

嗜好品は、この先どうなるのだろうか。全ての「もの」と「こと」が嗜好品化するという社会が出現すると私は考える。大きな括りの定義では、嗜好品とは生存に関わらないもの、ということだが、生存に関わるという状況がほとんどなくなれば、全てが嗜好品化する、ということだ。これを「shikohinazation」と呼ぶことにしよう。

午前中の研究発表「嗜好品としてのアイドルグッズとアニメグッズ——台湾哈日族が抱く「妄想」に関する文化社会学的研究」を聞いて、現状についてのまさしくいい例だと思った。哈日族が日本と関わりがあるという点は、嗜好品の政治的な問題としてたいへん重要な事例である。

いったんまとめておこう。楽しみを極小化しつつ科学技術が嗜好を規律化するという流

れが一方であり、他方で、全般的な嗜好品化も進行する社会が現れつつあるということだ。ただし、この二つの方向性や流れがどのように交わるかは見えてこない。とはいえ、嗜好品文化と政治というテーマは複雑で難解であるものの、実は現代を理解し、未来を考える上で重要な問題に違いない。これについてはいずれ稿を起こさなければならないかもしれない。

漠然と今考えるのは「カワイイ」現象と猫ブームの例だ。猫の嗜好品化というと反論が出る恐れがあるが、ここ 20 年以上続く「カワイイ」現象や現代の猫ブームは、嗜好品と政治の問題だという気がしている。

(了)

* 本稿は、第 15 回嗜好品フォーラム（2017 年 5 月 13 日、京都新聞文化ホール）における、基調報告講演「嗜好品が政治を帯びるところ — 「つながり」と「からだ」を改稿したものである。

斎藤 光/さいとう ひかる●1956 年青森県生まれ。京都大学理学部動物学科卒業。北海道大学大学院環境科学研究科、東京大学大学院理学系研究科修了。京都精華大学ポピュラーカルチャー学部教授。もともとは生物学が専門、その後の研究関心は性科学史や考現学、風俗研究など広範にわたる。嗜好品文化研究会メンバー。著書に『幻想の性 衰弱する身体』（洋泉社 2005）など。論文に「二人」の戦後史試論 —— 六〇年代に何が変わったのか（富永茂樹編『転回点を求めて 一九六〇年代の研究』世界思想社 2009）など多数。

(2) 『平成 29 年我が国の人口動態』（厚生労働省政策統括官〔統計・情報政策担当〕）p.24

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/81-1a2.pdf>

(3) 『平成 24 年版子ども・若者白書』（内閣府）p.6、第 1-1-3 表 主な死因別乳児死亡数の推移

<http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h24honpenpdf/pdf/1-1-1.pdf>

(4) 『平成 29 年我が国の人口動態』 p.50